〈はじめに〉

詩人で作家の三木卓さんが書かれた『ぽたぽた』という児童書があります。もう何十年も前に出会い、いまでもときどき手にする大好きな本なのですが、その中に「がようし」という短い話があります。男の子のリョウが、画用紙を前にしてお絵かきをしようとしています。さあ何を描こうか。すると手にしている絵筆が、「何だかわからないもの」とお題を出します。そこでリョウは、勢いよく筆を走らせて「何だかわからないもの」を描き上げます。すると・・リョウのまわりに、庭の雑草やら入道雲やらいろいろなものがやってきて、口々に「これは自分だ！」と言ってけんかを始めます。リョウがあわてて画用紙を裏返すと、それらはパッと消え、リョウはまた、まっ白な画用紙に向き合います。ただそれだけなのですが、この物語の中には、今回のテーマである線を描く、ということの深い意味が込められているように思います。

幼い子どもは、だれかに命じられたり教えられたりしなくても、自ら進んで線を描き、何かを生み出そうとします。生みだそうとするものは、動物や乗り物などの絵である場合もあれば、疑似文字とよばれる読めない字で記された手紙である場合もあります。それが絵であれ文字であれ、まず、一本の線が空間に引かれるところからスタートします。でもどうやら、ゴールがはっきり決まっていないことも多いようで、そんなときは、何を描いているのか、と尋ねられると、筆の進みにつれ、どんどん答えが変わって来ます。何本もの線が引かれ、それらがつながったり交わったりするうちに、新たな何かが心の中に生まれてくるのでしょう。初めはゾウに見えていたものが、そのうちに、帽子になったり車になっていったりする。傍から見ている大人には、ただのぐちゃぐちゃにしか見えず何だかさっぱりわからない。でも子どもにとっては、間違いなくそれは「ゾウ」であり「帽子」であるようで、得意満面に解説してくれます。子どもが、意志と意図を持って体の外に何か（それは線だったり、声だったり、身ぶりだったりするのですが）を生み出し、それに自分なりの意味を与える。だれかにも解ってもらえなかったとしても、自分にとって、それはこのような意味があるのだ。そのような意識を持つことが、「自分」をかたどって行くのではないかと思います。

最初は何だかさっぱりわからなかった線も、少しずつ、周囲の者が解るように変わって行きます。それは、子どもが、他の人と関わり合って行くための「共有」の必要性を理解し、表現の記号化を始めるからに他なりません。そして線は、いつか友だちや大人が見ても解る絵となり、手紙は子どもの通訳がなくても読みとれるものになって行きます。

今回の学習会では、子どもがまず１本の線を描くことの意義と、描けるようになるための学習を、考えて行きたいと思います。